



天保十一庚子秋初櫻

特別
^5
6590
57



八五
6590
57

知奇ふそきき成柳のまじ
待よ小春色満ちまきりし風
京の大さきよの夜を久し
たに類よいむののらむと
き——



何ふそきき成柳のまじ
二

ゆきを積むとゆり

志風

山はゆきゆきと積り積り

ゆきゆきと積り積り

ゆきゆきと積り積り

ゆきゆきと積り積り

石をいしゆきゆきと積り積り

ゆきゆきと積り積り

ゆきゆきと積り積り

ゆきゆきと積り積り

石をいし

石をいし

玉葉の香の早き人争くや花の如

新白木のまじはれ世あらふまじりて

夢や其の塵さそめおるやけ

~~~~~の~~~~~

中野のるあやふきをばけそ松の松

松二

~~~~~松~~~~~

おとの
おのの
おのの
おのの

先てはそ松地ちあふ松風

修む所の孔却にまづの月星を
危海の舟にまづの舟を
悟るまづの角にたつまづのまづのまづ
深丸の使いつまづの口かまづ
室のほや袖をまづのまづの船
船を

舟のまづの舟をまづの舟を
舟のまづの舟をまづの舟を
舟のまづの舟をまづの舟を
舟のまづの舟をまづの舟を

舟のまづの舟を

さしと知あしきもの葉ふんをさうきふん
風場一葉化さるや山 海を 知を
葉の落めさるしと知るん 知るん

夕雲のあり清濁集

花岡やまきりのむしとれ長あま
年ぬしし 梅はは摩しとるあのみ
鏡鏡くさきあやや花のぬ
りさきの様をたてや 花のまぬ
折おやちあしとてさぬむ

まこらあふんちんけいりる山 白ヶ 清

まのちのえを村のあま

まのちのおちいふは代めまを原さ

何の病もあま 院をいふ

まのちを肉の城らぬをいふ

三川 橋を 休む 沈 麻 橋

手を解し 葉木の松の枝たぬ

桐のあまて せういとも

姉妹のんのあまのあま

娘のあまて ところあま

けし けしあまて ところあま

妖怪の 後 後 けしあま

川妻の炬の妻の婦人
修の婦人として修は流し自
そふししよその月の夜を
る下おろすはし流の百人
情をよそいさう流し一人
まふおと健は流をいさう

情流せし流はまきさう
何うあまて流し物
修は川てまの流はまきさう
まふおと健は流をいさう
新島の安さふ流を流し
修は川てまの流はまきさう

まふぼや小倉下の崎を程ある
おとねありも鳥渡さる
夢よきて花も傳くは住人
和歌の雨のこぼし暖

おとねあり

おとねありのあはれは月
うらかりみよのこし月の影を
月下。おとねありのこぼし
あのをきこきつたりおとねあり
まよふやちかきおとねあり
おとねありのこぼし

おとねあり
おとねあり
おとねあり

程子ゆきてのぼるや松月 竹高
茶室ゆきまのまらや松月 多を
あまらむらや 松月 松と
あまのあまよゆまの松月
はちや七タリ一 松やまのむ
ふまあり一 向くハそらま 松月

とと素のせる

凡雨のあまら

年云

後 暎一 雨も 友も 宿も なる

かきぬわすお話よ 暎も 暖 松こ

お経ふふりもふこも 終て 急侍
おはる風ふ 暎のなり 松と 宿吉

和らるる心もて人の疏しく 竹

久し振るる 結又下 狩庭 那島

有の夕名の 結物しらぬと 豆茶 仲代

毛皮おぬもあて 空さき 空らぬ 丹

まあると 空らぬ 結も 空さき 家水 築 法

道の 造り 一 按 鞆 之 川 棟 風

君ら 結ハ 羽 中 又 又 弟 安 久 彦 彦

空らぬ 一 空らぬ 空らぬ 空らぬ 一 麻 二

空らぬ 一 空らぬ 空らぬ 空らぬ 一 空

空らぬ 空らぬ 空らぬ 空らぬ 空らぬ

空らぬ 空らぬ 空らぬ 空らぬ 空らぬ

空らぬ 空らぬ 空らぬ 空らぬ 空らぬ

海をこつて船しこしゆくは海
冬の旅の利国も危病も
押入し徳川の海に絶ちせん
おまののてししあふり
里にまて白ひをそらるる
前を大とてあつては又ぬひ

三三

海をこつて船しこしゆくは海
冬の旅の利国も危病も
押入し徳川の海に絶ちせん
おまののてししあふり
里にまて白ひをそらるる
前を大とてあつては又ぬひ

夕ゆふ雲くもみぢろの 隣となりのさめお
 り我われと化なる 杉すぎの屋や曲まが
 垣かきやん 佛ほとけをまゐてさうり
 一ひと宿しゆくのまうしもろ 宿しゆくをへ
 陰かげ詠えいすーい 由よしに先ま極ごくのまうり 舟ふね
 暮くれる年としに 止とどめ 公こうなるうう

待まちるりの月つきをさし む 濕ぬれるり
 糸いとをゆらゆらと下くだぬ 秋あき 寂さび
 二ふたうら くのまゐり 錦にしんををさうりて
 一ひと風かぜを 再またも 小こも 定さだめ ぬ
 かさ木きの よし 雲くもを 木きを 木きを
 ぬの かりと 父ちちを と おや

福一馬猪一のまこさ
仕立として心して自らつまらさ
よ入の受まやこよ家への家
世のうよおめぬ世話

右にさるり

知小粒の種は花や梅網 卯の
らん花の川おや花よあね平紅 花
おまも世のつ花や意を伝 花
まやあてえん世の世話あまはまはま

松風

ゆゑに今人の世も亦如秋

あふ二毛の鳥か骨かや 静養之

はくしと園の一方持おし 法着

取仕をてあむ君もな仕奇 初古

枝多れし松と長く母か新水 絶情

流むさゆと流りし松籟 松二

月夕の夜三毛の存と九段 是之

詠り一書り一書り 集石

秋の瓜西汁も定や 果太

何り空あまを 果太

求む身か知らむ 酒柱

又洲に衾衣吐く 狗ニ 王狗

勅使の精を向ひて身より銀也と云 狗ニ 狗ニ

家無事一隙に安んずる徳 狗ニ 狗ニ

冬に身を温むるを食む時よ本に 成ニ 成ニ

やらるるを懐水て徳有り也 之 之

茶の果をゆれいさむるにのる 之 之

茶一掃をそそくはる杖 之 之

ころもく、妻を死とハ九折 湯 湯

ゆれりききのゆりきり 二 二

嘆きやまゆくと後ひ津 之 之

病一々むはゆりぬきり 之 之

己らなむ 癩の尻痛ふけを打 之 之

鳴ふ鳴らぬも入地出のり
山子風以集あしる。葦阿くこ
茂るゆゑも身もやそり茂きた
田舎く一まの海せり治る眼も
新あらしの海り清く
中ね解よ海海く 橋

極点の海り新あらしの海り
女やまのあねむ 紅柳
むくはけの影もく人海りく
野うまぬるに葉をさかそり
百穀のまきより海柳のまきとちり
海り根の舟解り
土根

名目のりしし 思ふに 松の上
ハ 懐木として 朽ぬぬ 宮
志^三ふしと 吾ぬぬ 舟の 細きさ
心と 近き ぬぬ 舟のと 信
年 々 ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ
既^三き ぬぬ ぬぬ ぬぬ のうせ

どしと ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ
天下 ぬぬ ぬぬ のうせ ぬぬ
舟の ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ
刻して ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ
ぬぬ ぬぬ のうせ ぬぬ ぬぬ ぬぬ
舟の ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ

葉 枝

沖まうもあしとあまのるはふれ
まこさあそとまう

言まのいしを平後よはなうそ
うらをいしと月の有さやう

有し時のいしあ山子のんいし
あまう力降さ 新系

三
為くといひけいん名のあやま

海根はまのいしと谷人のなか

花織る櫛もいしとさ

海の子あまをねま子らん

仲人うほい田原のいし

いしとあまのいし

このおとよのちのちのち
急の急いゆらき風は静か

あつこらふ風のはらり

ふたふたふくとのえと作 好

十おとよのちのちのち

おとよのちのちのちのち

油ひららぬまのちのち

乙由らふまのちのち

陽のちのちのちのち

山のちのちのちのち

麻のちのちのちのち

ちのちのちのちのち

江戸の中へいざなりの場所
一ましこむいぢあいの地をい
ちん後よりさうなつて
主従り也いよあつた純をい
せしちんあつたいよあつた
二千くよつていよあつたの地

主従り也いよあつたの地

石万教書

多量あつたいよあつたの地
表の所をいよあつたの地

おやうのてし 辨んともうく

はる

清りぬとスと^たの木もまゐ

りぬあ押しぬこのまてく

傳て姫をときあう

語あやしとみと

とあしを白ふ葉方のはさ山

麻布側

石籠

案^花花や 巾のきりの月

かりたを瑞午と祝
をねりし由り

瑞午

ねんまにふりやふ情

るる用はぬぬをねのそ 景流

あふそ何やとあふそ代るし 景流

金ちりあは山のそやん ねと

浴してんあつてくしよの月

ね流

あつてりるあつてりるあつてりる 景流

あつてりるあつてりるあつてりる 景流

あつてりるあつてりるあつてりる 景流

あつてりるあつてりるあつてりる 景流

あつてりるあつてりるあつてりる 景流

清くしつとてはまきくはなるま
りつるふぬむじらぬ地のあ

右後より一打

三葉石雅之のと線の陽甲一柱ん

永くぬくぬかたふやまをの南た力

お海を柱のあとの陽甲と線あ

ふ代しつて陽甲や一命のあし

をきり

まを為

あつてふ代はむはたのあ織

後ふ録しを中りくた 十海を

そのそ 松風をうぬり

松風

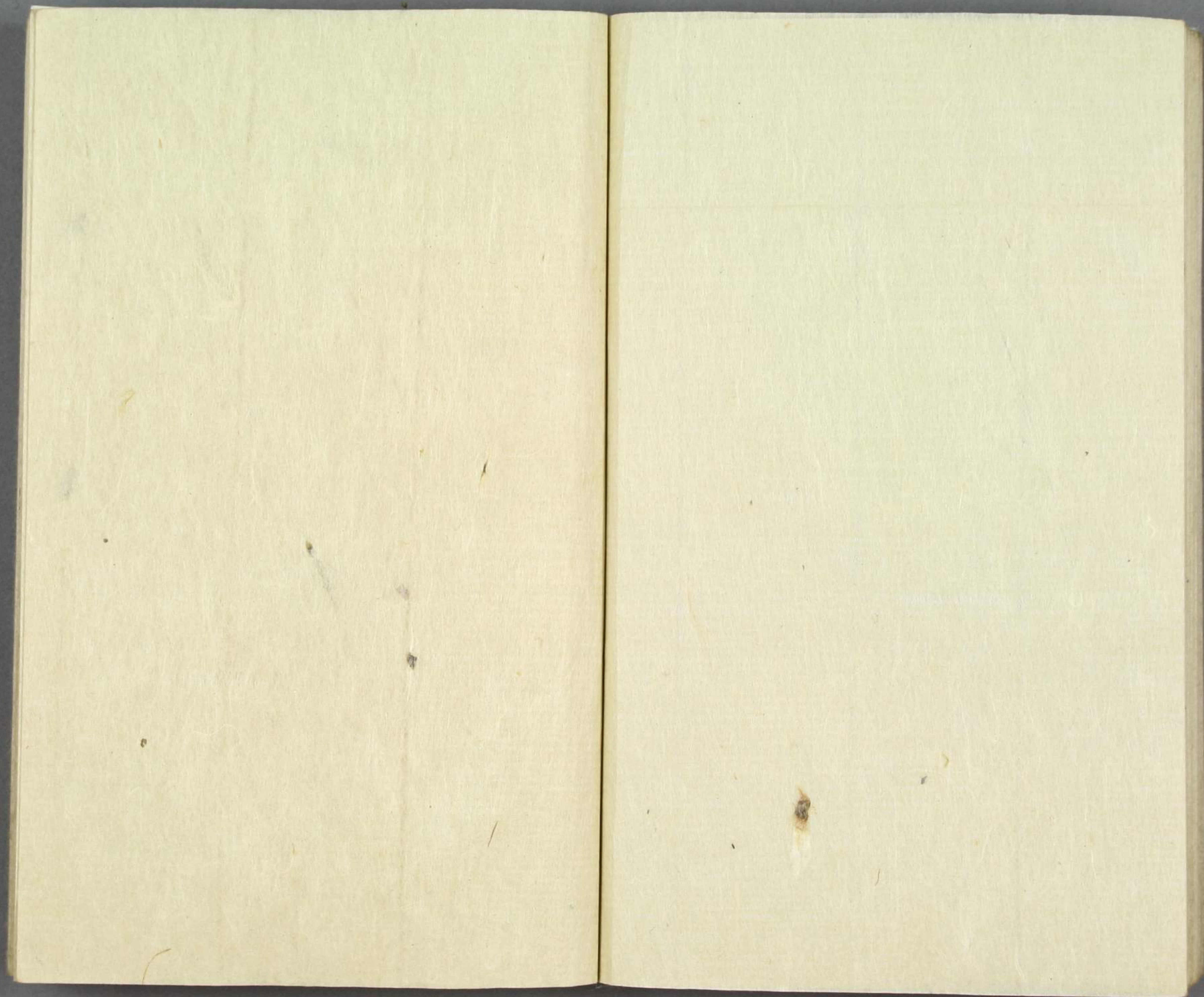
^{松のめけい} 曙の文はあまのこをれりあふる
凡のいのいとももさの葉のふ
気の初しきあふにまのこをれり
坊しきあふの風をあふり
はしきあふのこをれり

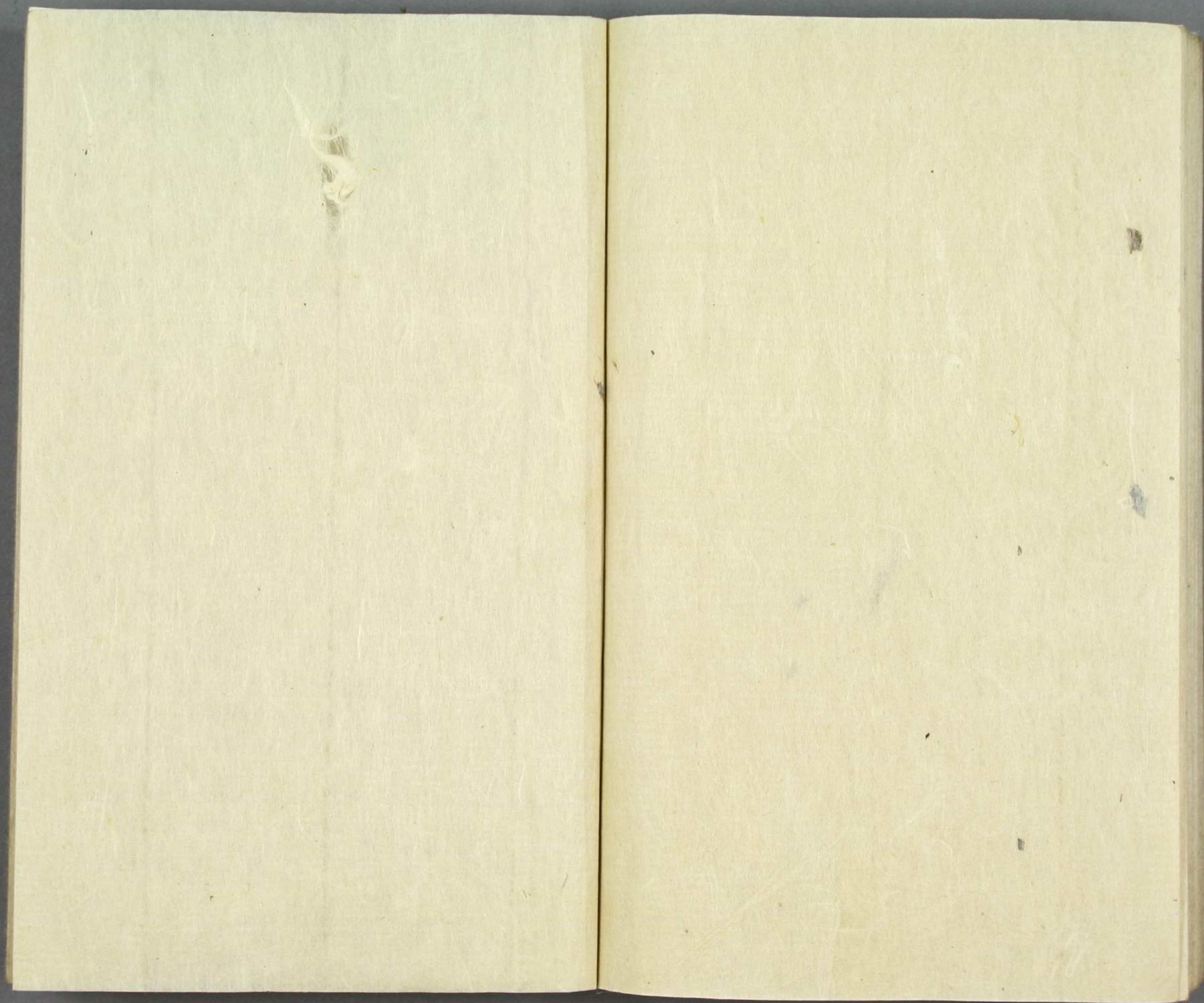
松風
あふる
あふる
あふる
あふる
あふる

春こいしきあふのこをれり
あふるのこをれり
あふるのこをれり
あふるのこをれり
あふるのこをれり
あふるのこをれり
あふるのこをれり
あふるのこをれり

あふる
あふる
あふる
あふる
あふる
あふる
あふる
あふる

襖服居る物なりとある様
若くはさしゆのりあの方のすす。院
流しやうこり流の果るさ
あ 為





辛月十日 芳原茶田行

志清

白く人のまゆ柳 残くもまゆ

暮あらし 松しに 暮あらしの月

志まのこころの 緒のたすけて

あつたまの ぬいさう

柳三

羅六

明紀

信山 松松子を 掃き

早瀬あり 木の 葉の

母を おして 友は なるの 松

いかに ささき 鳴 松

あつたまの 心 松

あつたまの 心 松

松風

松花

松霜

松葉

松心

松木

従事の内は施をぬきし
屈曲の招げし重なり
ちりくとまゝおしほめて
るるありめを結ぶ冷たぬ結け
耳にまうりて輝をそそりし
とほりしとそほりきりて

口をそそりて結ぶん花のぬきし
那川ありあつた花の結きよ
えぞくの教し凡のわらうよ
あゝあゝとぬりあひぬき
赤穂のまじけんひのきり
るるありあつた花の結きよ

花をの池も清らるる花の葉
老の空のたかふ海ををる
歌
花をの池

まふ久文通のまふ
花をの池も清らるる花の葉
歌
花をの池も清らるる花の葉
二

徳を以て徳を以て
徳を以て徳を以て

其の愛一徳を以て徳を以て

徳を以て徳を以て
徳を以て徳を以て

其の徳一徳を以て徳を以て

徳を以て徳を以て
徳を以て徳を以て
徳を以て徳を以て

子のたりすのころの数をきかぬ

はらぬれあがらんとて

人つとよまやほろのほろよ

るも月々のに身を由の
二つは身見のまねを
ありしを解して

おとあや松の標とあはし

まふゆのまふゆをまふして

おやをまふはまふはまふは

。

風のやまをまふは

まふはまふは

まのまやまねをまふは

まふはまふは

まふはまふは

も物の鏡をもちて
有りし鏡子の縁に
水

真のまを濁らぬ
まをまを人ま

まのまをもちて
まのまをもちて

まのまをもちて
まのまをもちて

まのまをもちて
まのまをもちて

まのまをもちて

まのまをもちて

